

Special Feature
Reframing
Japan
from
the
Outside



Part 6

「論考」

『日本美の再発見』（1939年）などの著書で知られるドイツ人建築家ブルーノ・タウトは、20世紀前半に日本を訪れ、伊勢神宮や桂離宮に日本美の極致を見出し、当時の人々を驚かせた。簡素さや清澄さという日本の芸術的・文化的特質は暮らしに根ざしたものであり、今日なお古びることなき価値観として建築や美術、工芸などの分野に浸透している。いま見直すべき「日本的なるもの」とは何か。タウトの視点にその本質を学ぶ。

ブルーノ・タウトと日本文化

Ota Takashi 太田隆士

桂離宮と 郊外型集合住宅

ブルーノ・タウト(Bruno Taut, 1880-1938)というドイツ人建築家は1933年5月に来日し、桂離宮を訪れ「泣きたくなるほど美しい」と感動的に書き記したことで知られている。彼は装飾の少ない桂離宮を日本的な美を代表するものと高く評価し、いっぽう装飾に満ちた日光東照宮を「日本文化の大敗北」と酷評した。我々日本人はドイツからやって来た建築家により、日本



出典：『建築家1939年2月号』1939年2月10日、国際建築協会

ブルーノ・タウトの肖像

建築のみならず日本の美が、桂離宮に代表される簡素さ、清澄さにあると指摘され、納得し、自国の文化に自覚と誇りをもったと伝承されている。ところでドイツの首都ベルリン郊外の集合住宅群が2008年に世界文化遺産に登録された。20世紀初頭、大都市の出現とともに住宅が不足し、低

所得者層が陥っていた劣悪な住環境問題を解決するために、合理的な間取りで割安な住宅が郊外に建設された。その大部分にかかわり主導した建築家の一人がタウトであった。なかでもブリッツ大規模住宅地区にある馬蹄型住宅がシンボリックな形状をしていることから注目を集めている。

労働者のための安価な住宅建築に尽力した建築家と、桂離宮に魅了される建築家、この両面をもつタウトとはどのような建築家であったのだろうか。また彼は約3年半の滞日中に、『ニッポン』、『日本文化私観』そして『日本の家屋と生活』と3冊の日本文化論を残し、それは今でも読み継がれている。しかし世界的に知られた建築家であったにもかかわらず、なぜか日本では建築の機会には恵まれず、旧日向家熱海別邸地下室が唯一の建築作品として残されているにすぎない。この3冊の著作と唯一の建築作品を手懸かりに、彼はいつたい桂離宮の何

にそれほど感動したのか、そもそもなぜ日本に関心をもったのか、さらに彼の著作等を我々日本人はどのように受容してきたのか考えてみたい。

ジャポネズリーから ジャポニスムへ

タウトの1冊目の日本論である『ニッポン (Nippon)』には「1933年6月〜7月執筆」と記されている。そ

の中で自分と日本との結びつきについて語られている——「私自身二十歳の頃、刀身や布地の模様などの安価ではあるが複製ではない日本製の見本帳を何冊も手に入れていたし、日本の多色刷りの木版画の研究に精を出していた」。つまり彼は若い時期から日本の工芸や芸術に関心を抱き、自らの建築観を形成していた。このような傾向はタウトにとどまるものではなかった。爛熟したヨーロッパの文化においてすでに18世紀のロ

ココ時代に異国の珍しいものへ興味を示され、中国や日本の風俗および工芸への嗜好がシノワズリーとかジャポネズリーとよばれ人気をえていた。そして19世紀中頃に例えば絵画においては、3次元の世界を描き出すというルネサンス期以来の基本原理が見直され始め、ヨーロッパの芸術家たちは新たな啓示を求めていた。それは言葉の変化にもあらわれ、ジャポネズリーに代わりジャポニスムという言葉が使われ始めた。つまり日本の芸術・美学への関心は、

たんに異国趣味にすぎなかったものから造形原理・世界観を含むものとなったのである。作曲家クロード・ドビュッシーが交響詩「海」の楽譜を出版するとき、表紙に葛飾北斎の「神奈川沖浪裏」を選んだのも1905年のことであった。こうした時代の流れのなかで、タウトは『ニッポン』で外国からの訪問者として日本人が自覚していない側面を次のように示した。「今日の近代建築がこの世に生まれた頃つまり1920



写真提供：PIXTA

桂離宮

タウトにより、日本的な美を代表する建築として絶賛された。



出典：Siedlungen der Berliner Moderne, 2009, Braun Publishing

ブリッツ
大規模住宅地区・
馬蹄型住宅

住宅と庭
つまり
外部環境との関係が
重視されている。

年頃、ヨーロッパの居住空間の簡素化を最も強く提起したのは、大きな窓や押入れをもちそして完璧なまでに純粹に設計された、簡素で完璧なまでに自由な日本の居住空間であった。欧米化の道に突き進むようにしていた日本に、日本建築の純粹さや簡素さが素晴らしいものであり、ヨーロッパの住宅改革のモデルとすべきものであると指摘した。この点については来日前に書かれた著作でも言及されていた。まず「居住空間の簡素化」についても少し詳しく考えてみたい。

「Kirei」あるじは『装飾と犯罪』

タウトの2冊目の日本論が『日本の芸術 (Japans Kunst)』(邦訳名『日本文化私観』)である。前著から約1年半を経て、内容的にも数段優れたものとなっている。その中で彼は日本の芸術の特質を日本語に見出したと書き記している。『美しき (schön)』と『澄みきった (rein)』と『こう』ことを表すのに日本語は同じ言葉を用いるのである。すなわち『キレイ (Kirei)』という言葉を。日本人が普段「この水はキレイ」と言ったり、「この絵はキレイ」と何気なく用いている表現が、ドイツ

人タウトには注目すべきことであり驚きであった。こうした指摘は、慣れ親しんでいるが故に見落としてしまう日本語の特質に気づかせてくれる。

タウトの驚きの原因はじつは彼の建築改革の理念にあった。『新しい住まい』(1924年)のなかで「簡素な清澄さ (Reinheit) と各部屋に見通しがきくことは、女性の仕事量やそれに伴う煩わしさを減らし医者や薬への支出を削減するなど、それ自体ですでにとっても大きな治療効果を与えようという影響を及ぼすので、そのような住まいが美しいこと (Schönheit) もまた自明のことである」と論じられている。彼が建築に求めた新しきとは、清澄さ (Reinheit) を保持していることが美しいこと (Schönheit) なのだということであった。

それは建築のモダニズム運動の標語でもあり、市民社会に相応しい機能性や合理性に基づく建築が求められていた。オーストリアの建築家アドルフ・ロース (Adolf Loos, 1870-1933) は「文化の進化とは日用品から装飾を取り除くということと同義である」と新しい時代を表現し、装飾は犯罪であるというセンセーショナルなタイトルの『装飾と犯罪』(1908年)を書いたのであった。このようにジャポニスムは建築のモダニズム運動にも強い影響を

与えていた。タウトの建築観もそうした時代のなかで形成され、それが実践されている日本を訪れ、「キレイ」という言葉に日本的なものの核心を見出した思いであったろう。

もう一つタウトから見た日本語の特質を考えておこう。注目された言葉は *Aji* を表現するもの一つとしての *shibui* であった。「渋い」は「趣味のよい、落ちついた、控えめな」と理解されている。しかし彼が注目したのは、*shibui* が芸術作品に対して用いられているのみならず、人の振る舞いや集団の雰囲気等すべてに用いられることであった。すなわち日本語および日本においては、例えば *shibui* という審美的なものに用いられる言葉が、芸術の領域のみならず他のすべての領域に使われ、その社会のあり方を創り出し、律するものとなっていることであった。それは深い叡知に基づくものだと褒め称えられているのである。

造形芸術から応用芸術へ

再度タウトの青年時代を想起しておこう。19世紀末から20世紀の初めにジャポニスムが、とりわけ家具、装身具そして建築の分野で力強く展開され、

た。こうした状況のなかで画家、工芸家そして建築家をも巻き込んで、ドイツ工作連盟(*1)やバウハウス(*2)が設立され、アール・デコ博も開催されたのであった。

住まいと生活

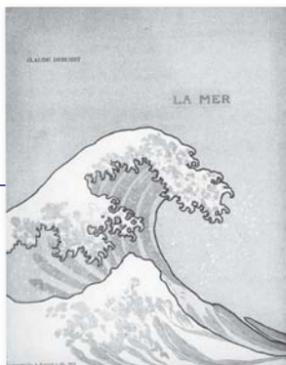
こうした歴史的経過のなかで *shibui* や *shibui* に着目するタウトには、欧米化を推進する日本が表面的なものを追っていると思えたに違いない。滞日中最後の著作である『日本の家屋と生活』が1936年2月に脱稿された。前2冊との重複も見られるが、最も充実した内容となっている。

まずタイトルについて考えておきたい。ドイツ語では *Das japanische Haus und sein Leben* である。日本語に訳すと「日本の住まいとその生活」となるが、「その」は「日本の住まい」を指しており、「日本の住まいの生活」という意味なのである。分かりにくいタイトルであるが、タウト自ら説明を試みている。日本の住まいにおいて、その背景は障子が開け放たれた先に見える自然であり、良い意味での野外劇場の舞台のようでもある。例えば夕方に小さな町を通りすぎると、床に座ったり横になっ

たりしている人の自然な振る舞いが見える。彼はここに、日本の風土に適應した住まいの生活、すなわち人と住まいと自然との釣合いのとれた関係を見たのである。

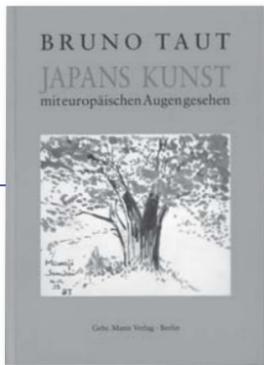
彼はさらに、日本では見るための建築は創られてこなかったし、住まいにおいて最も関心がもたれるのがその物質的な外観ではなくその生活であり、このことがおそらく日本と諸外国とを区別するのだと論じている。見栄えのする外観をもち外界を遮断する諸外国の建築とは異なる。換言すれば、日本建築は応用芸術のような建築であるとも言えよう。また「野外劇場の舞台」という印象はタウトが桂離宮に抱いた印象に他ならない。

ところが、風土に適して人が生活できているはずの日本建築が、近代化により誤った方向に向かっているとタウトには考えられた。例として深い庇が取り上げられている。これは日本の強い日差しから生まれたものであるが、欧米化した近代建築からは姿を消す傾向にあった。当時彼がある欧米風の知事公邸を訪れたとき、その執務室のヨーロッパ風の窓とバルコニーのドアに庇はなく、バルコニーに敷かれた板石は日差しで焼け、日差しと熱風が吹き込み室内は暑く、汗びっしょりとなった体験が皮肉を込めて描かれている。



ドビュッシー
交響詩「海」
初版楽譜表紙

ドビュッシーは身の回りに日本の美術品を置いており、北斎の描く線の抽象表現に魅了されていた。



『日本文化私観』

タウトは色紙(しきし)に日本的な絵を好んで描き、ドイツ語版表紙には「仙台の紅葉」が用いられている。



出典：『日本——タウトの日記 1935-36年』
藤田英雄訳、1975年、岩波書店

左から村岡景夫、柳兼子、タウト、柳宗悦、河井寛次郎、バーナードリーチ (1934年)。

Bruno Taut

残念なことにはこの傾向は今でも見られる。

建築上の「軸をずらすこと」にも強い関心が向けられている。小さな住まいから桂離宮にも見られるこの特長は、外から視かれにくいという機能をもつと同時に、非対称の美を生み出していると評価されている。タウトは「軸をずらすこと」はギリシアにおいてもあったことであり、それがローマにより軸が強要されるようになったが、これは野蛮化であったと見なしている。

工芸品のよくな住まい

約3年半の滞日中の建築作品が唯一つだけ残されている。旧日向家熱海別邸である。これは地下室を改造したもので、広さはわずか約130㎡にすぎない。ベルリン郊外の集合住宅群において1万2000戸もの住宅を建設したタウトにはまことにささやかなものであり、かつては否定的に評価されてきた。しかし近年、隈研吾著の『自然な建築』などでも好意的に論及されている。またタウト研究者であるシユパイデルは「旧日向邸の部屋と椅子をはじめとした家具が、タウトの造り上げたものの中で、最も美しいもの

であることには疑問の余地はない。それと同時に、タウトの最後にして見事なまでに完成した作品である」と位置づけている。この地下室に足を踏み入れると、まるで工芸品のよくな住まいだと感じられる。

旧日向邸改造の際にタウトを支えた最も重要な人物は吉田鉄郎（1894-1956）であった。日本のモダニズム建築の代表作である東京中央郵便局旧局舎は彼の代表作の一つであり、さらに日本の建築、住宅そして庭園について3冊の著作をドイツ語で執筆し出版したことも大きな功績を残した。吉田はタウトと旧日向邸について「日本間はタウト氏が最も尊敬してやまない小堀遠州の作品を御手本として作ったものであろう。小壁に吊束（*3）を見せていないところ、欄間の取り具合、長押（*4）をつけなかったこと等々。短い日本滞在中によくもこのように日本建築に対する理解を深めたものだと思う」と報告している。

旧日向邸において注目すべきことは、傾斜地にある地下室であるが故に、平面的には「く」の字型に曲がり、さらに室内には海に面した側と山側とで約90cmの高低差が生じているにもかかわらず、こうしたことをすべてを利点としていることである。竹の壁面や漆塗りの家具とともにタウトが最大の関心を払

つたのは、室内と室外との関係である。各部屋には角度が変わることによってそれぞれ異なる海の佇まいが眼前に広がり、さらに床面から階段状に上壇の間につながる。洋間と日本間では様々な高さから室外を眺められるようになっている。また畳の黒い縁はすべて海に向かうように敷かれており、視線を自然に海に誘導する。タウトの提唱した建築理念の一つに屋外居住空間（Außenwohnraum）というものがあるが、これは室外の空間を居住空間と見なすものであり、室外の居間とも言える。旧日向邸でもその理念は健在で、立地条件を活かして、住まいと人と海との絶妙な関係がここに実現されている。

ミスリーディングと タウト受容

ここまでの考察から、タウトが桂離宮を訪れ「泣きたくなるほど美しい」と感動したのは、その簡素さもありはしたが、建物と庭園との見事なまでの関係であったと理解できよう。庭園つまり自然と連なり調和した建築であり、さらには「野外劇場」のような室内と室外の関係であり、さらには住まいと生活との関係であった。ブリッツの馬



旧日向家熱海別邸
地下室
右／竹の壁面と
檜材の床が美しい
社交室。
左／上壇の間をもつ
洋間。

蹄型住宅において試みられていることもまさにこのことだったのである。弧を描いた建物の中庭側の窓からは池へと連なる窪地にまるで自宅の裏庭のような景色が見え、裏庭など持てない低所得者層に快適な居住空間を与えているのである。

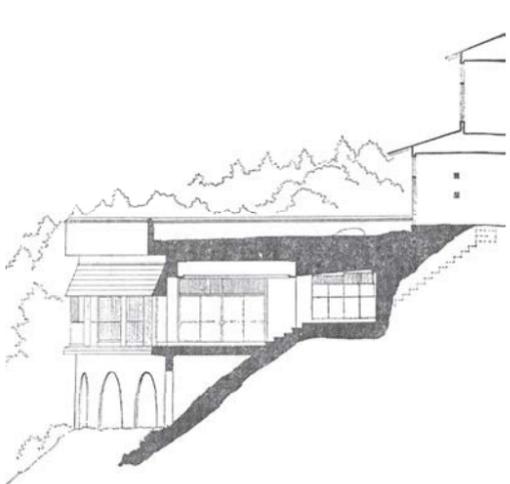
タウトは新しい建築を目指すなかで、日本の工芸や建築に関心を抱き、日本文化を自らの教養体験のなかに含めていった。であるからこそ来日し、短い間に日本文化の特質に深く分け入り、日本人が注目する著作を残すことができた。ドイツ人が小堀遠州や狩野派について熱く語る姿勢も深い共感を呼び起こした。実り豊かな文化とは、「内」なる自分と「外」なる他者との絶えざる対話の中から生まれてくるものなのである。

ただタウトおよび彼の著作に接するときに忘れてはならないことは、当時は日本もドイツも極端な国粹主義と戦争という最悪の時代にあったことである。彼の著作にも彼を受容した研究者にもその影響を読み取ることができ、残念なことであるがタウト・ブームおよびその受容において、彼の一面だけが取り上げられ、決まり文句と化し、必ずしも正確なタウト像が伝えられていない。彼を白木の美しさのみを追求した美学の持ち主であるとか、建築の

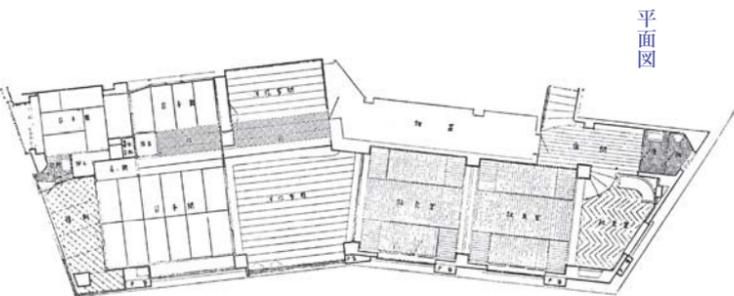
モダニズム運動を推進しただけの建築家であるとか見なしてはならない。彼はむしろ色彩を多用した建築家であること、彼にはすでにモダニズムを超えて建築と環境の関係を志向した建築観があることを理解すべきである。滞日中のタウトに最も身近で接していた人

物からの、実際に日々接していたタウトと日本の研究者が説明するタウト像とは別のようだったという証言を心に留めておいていただきたい。そのうえで彼の著作を手にとっていただきたい。この稿を結ぶにあたり、タウトが当時の日本建築について述べたことを引

旧日向家熱海別邸
地下室の断面と
平面図
地下部分の
平面図からは、
「く」の字型に
曲がっていることが
見て取れる。



断面図
平面図



1/300

用しておきたい。これは建築だけではなく日本文化全般について言えることだからである。
「民族的なもの力は、広い視野を持つべきほど、そして民族がその民族性を喪失するのではと恐れなければいけないほど、いっそう強い。日本人のコスモポリタンの特性は日本人をそのような民族主義的な墮落から守るであろう。質に関して現代日本の創り出すものは、それらががびでも日本的であろうとはしていないことにより、質を保持しているものであり、そして日本的なのである」。

※「ツポン」、「日本文化私観」そして「日本の家屋と生活」の邦訳は参照したが、本文中の引用はすべて原文から新たに訳したものである。
（*1）製品の洗練を求め、産業育成を目指す改革運動を推し進めた。インダストリアルデザインはその活動に始まることされる。
（*2）工芸、デザインなどを含む美術と建築に関する総合的な教育と生産を行った機関であり、照明器具や椅子等のデザインで現代人の生活に決定的な影響を与えた。
（*3）鴨居が長くなる場合に、垂れ下がりを防ぐために上からつり支える柱。
（*4）柱を水平方向につき固定するもの。いまでは装飾として用いられる。

Ota Takashi

1952年生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科修士（独文学）。1997〜2016年まで、駿河台大学教授を務める。NPO法人日向家熱海別邸保存会元副理事長。論文にフルノ、タウトとジャポニスム（駿河台大学論叢49号）などがある。